



学校名：港区立青南小学校

氏名：芳賀 晶子

[担当教科：小学校全教科]

- 実践教科等：国際科
- 時間数：全4時間
- 対象生徒：小学校1年生
- 対象人数：83人

1 単元名

せかいのくになかよし

2 単元の目標（ESDの能力・態度）

- ・異文化に触れ合い、身近に感じることで、多様性を認め、他国の文化を尊重する態度を育むことができる。（つながりを尊重する態度）
- ・日本とは異なる文化的背景をもつ人々との交流活動において、あいさつをしたり、自分の思いや考えを表現したりして、楽しくコミュニケーションに参加することができる。（コミュニケーションを行う力）

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・モンゴルの自然や文化を知ること、世界には様々な文化や価値観があることに気付く【多様性】
- ・その土地の文化や価値観は、その土地の風土や環境と関わり合っていることに気付く【相互性】
- ・日本とモンゴルのつながりを知る【連携性】

4 単元の指導について

(1)教材観

港区では、平成14年度から国際理解教育の一環として「国際科」を実施している。国際科では、コミュニケーション能力の育成と共に、自国や他国の伝統や文化等についても学んでいる。

そこで、豊かな国際感覚を身に付けた人材を育てるために、本単元では、モンゴルを切り口に、多様性、相互性、連携性に焦点をあて、異文化理解と他者理解を深めていく。外国の文化を知り、体験することで、世界に興味をもたせたい。「新しいことを知って楽しい。」「世界っておもしろい。もっと知りたい。何かしたい。」という思いを十分に経験しておくことが、他者を理解し、他者と協力できる国際人を育てることにつながると考える。世界には様々な伝統や文化、自然や暮らしがあることを学ぶことで、児童の国際理解を深めていきたい。そして、今後、世界の様々な国や文化的背景をもつ人々に出会った時、それを肯定的に受け止め、良さや素晴らしさを見付けられるような素地を育てていきたい。

(2)児童生徒観

本校の第1学年の児童には、海外での生活を経験している児童や世界の様々な国にルーツをもつ児童も多く、異文化への興味や理解は高い。外国人講師による週2時間の国際科の学習も、毎時間楽しみにしており、英語でのコミュニケーションを積極的に楽しんでいる。

モンゴルについて知っている児童はほとんどいなかった。第2学年の国語の教材にあるモンゴルが舞台の「スーホの白い馬」の話の存在を聞いたことがあるという児童は数名いた。単元に入る前からモンゴルの写真を入れた暑中見舞いを出したり、教室にゲルの模型を置いたりしていたので、モンゴルへの関心が高まっていた。

発達段階の特徴として、まだまだ自分中心に考えるところがある。遠い外国のことについては、想像をするのが難しいことが考えられるので、指導方法を工夫していく必要がある。

(3)指導観

児童は、モンゴルについての知識はほとんどないため、学ぶこと全てが新鮮に感じられる状況を生かし、発見であふれた授業にしていきたい。また、体験することが学びに直結する低学年特有の発達段階を踏まえ、本物を見せたり体験をさせたりすることで、児童の理解を深めていきたい。授業の中で、モンゴルで購入した教材(民族衣装、馬頭琴、羊の骨の遊びであるシャガイ等)を有効に使い、見せたり、触らせたりして紹介していく。また、現地で撮影した映像や写真も授業の中で多く取り入れ、イメージをもたせやすくする。そして、モンゴル人との交流が何より児童の心に響くだろうと考え、モンゴル人ゲストティーチャーを招いての授業を第2時で行うことにした。

また、楽しく学習が進められるような振り返りカード(「青南パスポート」)を作成した。『「青南パスポート」をもっていれば、世界とつながることができる。たくさん書き込むことで世界ともっと仲良くなれる』と設定し、意欲づけをした。一斉授業や体験学習にて学習したことを、この「青南パスポート」に書きこむことで、個別の学びとして定着させるねらいをもたせた。



【青南パスポートの表紙と振り返りカード】

5 評価基準

観点	1. コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	2. 国際理解
評価規準	・モンゴルの文化に慣れ親しみ、楽しく活動に参加しようとしている。(1-1) ・モンゴル人ゲストティーチャーやモンゴルからのゲストに、進んでコミュニケーションを取ろうとしている。(1-2)	・モンゴルの言語や文化に触れ、関心を持つ。(2-1) ・日本とモンゴルのつながりを知る。(2-2) ・伝統や文化には様々な物があることに気が付き、それぞれの良さを見つける。(2-3)
評価方法	発言。 「青南パスポート」への記入。 授業への参加態度。	「青南パスポート」への記入。 授業への参加態度。

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	モンゴルってどんなくに？	日本ではない国(モンゴル)に興味をもつ。 モンゴルの基本的なことを知る。	モンゴルの基本的な情報を知る。 (国の場所、国旗) 遊牧民について、クイズ形式で知る。 (家畜について、家(ゲル)について、民族衣装(デール)について)
2	モンゴルをたいけんしよう	「本物」のモンゴル文化に触れ、モンゴル(異文化)をより身近に感じる。	モンゴル人ゲストティーチャーを招き、モンゴルの文化を体験する。 (あいさつ、馬頭琴(楽器)、デール(民族衣装)、シャガイ(遊び))
3	つながっているね、モンゴルと日本	日本とモンゴルの支援の関係を知る。	日本のモンゴルへの支援を知る。 モンゴルで活躍している日本人(隊員のインタビュービデオと写真)がいることを知る。 モンゴルからの支援(3.11の時)を知る。
4	日本をしょうかいしよう	日本のことを身近に思っているモンゴルからのゲストに日本のことを紹介する	日本の遊び、住まい、衣服、音楽について、モンゴルと比較する。 モンゴルから来日したゲストに紹介する。

7 授業事例の紹介

小単元名【つながっているね、モンゴルと日本】

(1) 指導案

(ア)実施日時

10月17日(金)第1限、10月21日(火)第3限、11月4日(火)第3限

(イ)実施会場

1年3組教室、1年2組教室、1年1組教室

- (ウ) 本時の目標 日本とモンゴルが互いに助け合ってきたことを知り、両国のつながりを理解する。
- (エ) 指導のポイント
- ・前時までは、モンゴルを知ることに関心をもち、本時では、日本とモンゴルの「つながり」をキーワードに展開させた。
 - ・写真や映像を使うことで、人や場所、現状などを想起させやすくした。
 - ・難しい言葉は、簡単な言葉に置き換えた。

(オ) 本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価基準・評価方法)
導入 5分	モンゴル(ウランバートル市)の写真を見せ、日本との類似点や共通点等を探させる。	モンゴル(ウランバートル市)の写真を見て、気が付いたことをあげる。	一斉	・「都市化」されていくモンゴルのイメージをもたせる。	モンゴルの生活に関心をもち、発言する。
展開 ① 15分	初・中等教育分野への支援である校舎の建設・設備について紹介する。	104番学校の校長先生が話していたことを聞き、日本が学校を建てる支援をしたことや、日本に感謝の思いをもっていることを知る。	一斉	・三部制から二部制に改善されたことなど、理解が難しいと思われる内容は、具体的に例を示して指導する。	日本からモンゴルへの支援を知る。(2-2)
	ウランバートル市ゴミ廃棄場での支援と、ウランバートル高架橋建設計画で建設された「たいようばし」を紹介する。	日本の国旗がモンゴルのゴミ収集車に付いていることに気づき、日本のゴミ廃棄についての技術支援を知る。また、橋の欄干にひらがなが書いてあることに気づき、日本の支援で橋が建てられたことを知る。	一斉	・モンゴルで、日本の国旗や日本語が見られるということに興味を抱かせ、日本とモンゴルとのつながりに気付かせる。	
展開 ② 15分	現在、モンゴルで活動している青年海外協力隊の隊員のインタビューを見せる。	現在、モンゴルのために活動している青年海外協力隊の存在を知り、隊員のインタビューを聞く。	一斉	メッセージの要旨については、板書に掲示して補う。	モンゴルで活動する青年海外協力隊のことを知る(2-2)
展開 ③ 5分	東日本大震災時、モンゴルの日本に対する支援を紹介する。	東日本大震災の時に、モンゴルが日本を支援してくれたことを新聞記事から知る。	一斉	国同士も互いに助け合うことが大切であることを気付かせる。	モンゴルから日本への支援を知る。(2-2)
まとめ 5分	「青南パスポート」に振り返りを書かせる。	初めて知ったこと、感想を書き、発表する。	個別 一斉		日本とモンゴルのつながりを知る。(2-2)

(2) 授業の振り返り

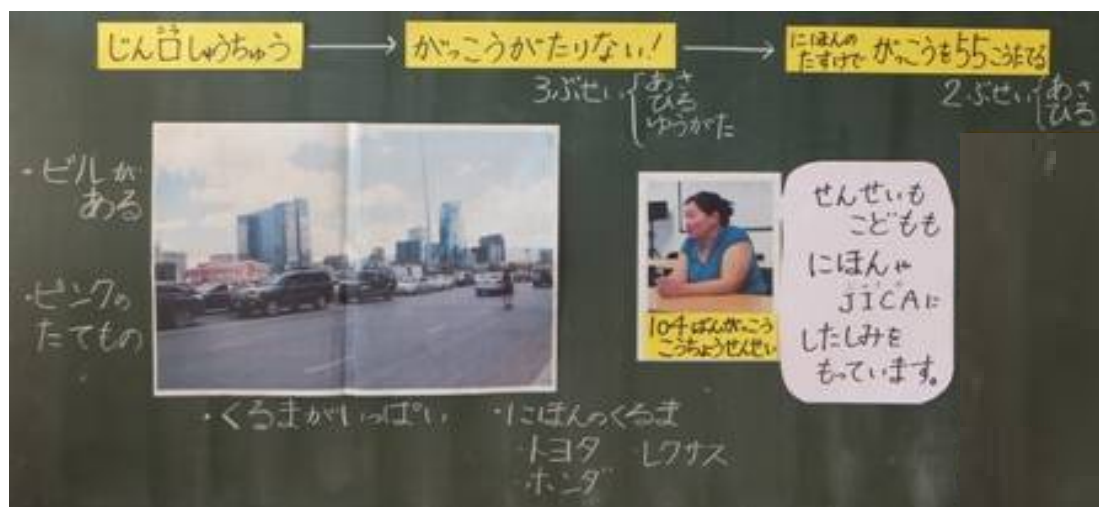
授業の最初に、フォトランゲージを行った。都市化されているウランバートル市の写真を見せたことは、

現在のモンゴルを示す上で効果的だった。前時までに学習してきた「遊牧民の国」モンゴルとは、印象が大きく異なり、「モンゴルにもビルがあるんだ」、「車があるんだ」など、素朴な発見があった。

支援については、日本がモンゴルに対して行った学校の建設や設備の支援を扱った。児童にとって身近であり取りかかりやすい話題だったといえる。ゴミ廃棄場の車には日本からの支援の証である日本の国旗があったり、「太陽橋」にはひらがなで「たいようばし」と書かれてあったり、自分たちが知っている「日本のもの」がモンゴルにあることを示すことができ、1年生にも理解できる分かりやすい教材として適していたと考える。また、実際に青年海外協力隊の隊員のインタビューも効果的であった。自分たち(日本の子どもたち)に向けたメッセージであったことも嬉しかったようだ。

改善点としては、内容が難しさである。「支援」を「助ける」としたり、具体的な例に置き換えて説明したりと、できる限り1年生に分かるようにしたつもりだったが、児童の反応や振り返りカードから十分な理解につながっていなかったと分かることがいくつかあった。言葉を簡単にするだけでなく、絵や模型など具体物を使って伝えるといった工夫が必要であると考ええる。

(3) 使用教材



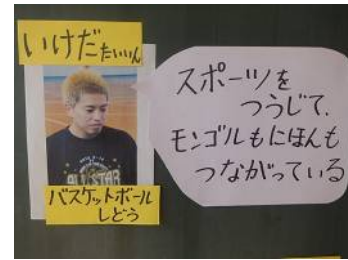
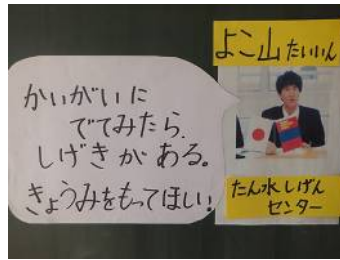
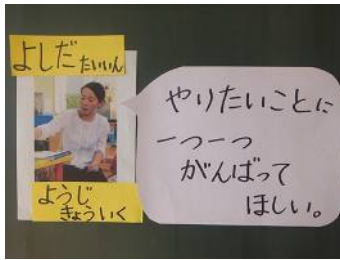
【フォトランゲージとモンゴルの学校についての板書】



【ゴミ廃棄場での支援】



【「たいようばし」の全体像(上)
モンゴル文字と日本語の欄干の対比(下)】



【青年海外協力隊の隊員インタビュー】

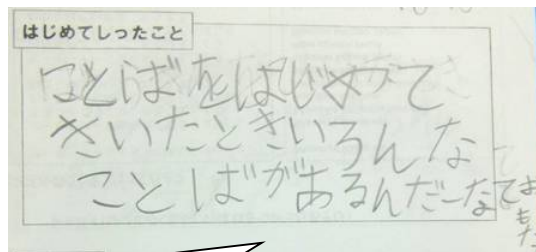
(4) 参考資料等

『産経新聞』2011年3月25日、朝刊、「モンゴル 公務員日給分の募金呼びかけ」

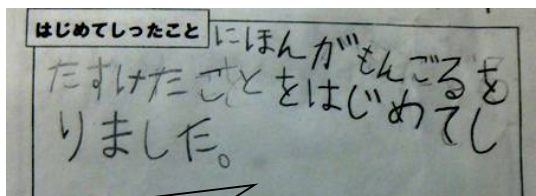
8 単元をととした児童生徒の反応/変化

毎時、振り返りとして、①初めて知ったこと、②感想、③仲良し度(5段階評価)を「青南パスポート」に記述させた。どの児童も、意欲的に書いている姿があった。自由記述である感想の欄に、8割を超える児童が、何らかの形で「モンゴルに行きたい。」「モンゴルのことをもっと知りたい。」と書いていた。

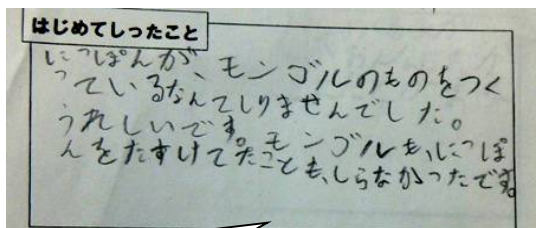
児童の感想



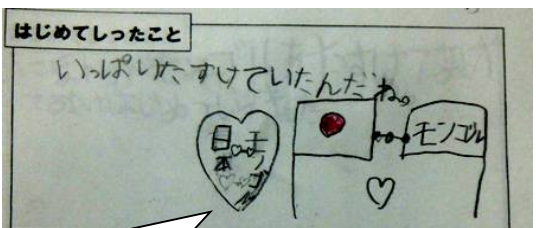
ことばをはじめてきたとき いろんなことばがあるんだなって おもった。



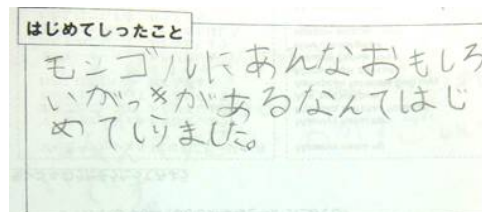
にほんがモンゴルのたすけたことを はじめてしました。



にっぽんが、モンゴルのものをつくっているなんて しりませんでした。うれしいです。モンゴルもにっぽんをたすけてたことも、しりませんでした。



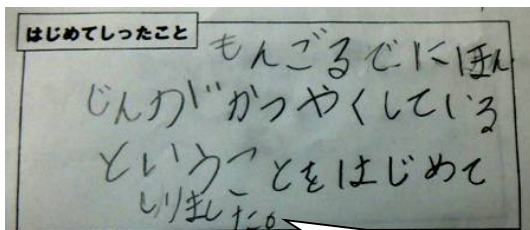
いっぱい たすけていたんだね。



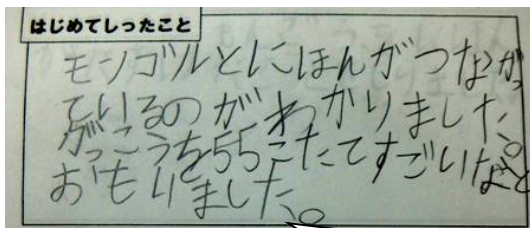
かんそう
モンゴルにあんなのがあるなんてわたしもモンゴルにいてみたくなりました。

モンゴルにあんなおもしろいのがつきがあるなんてはじめてしました。

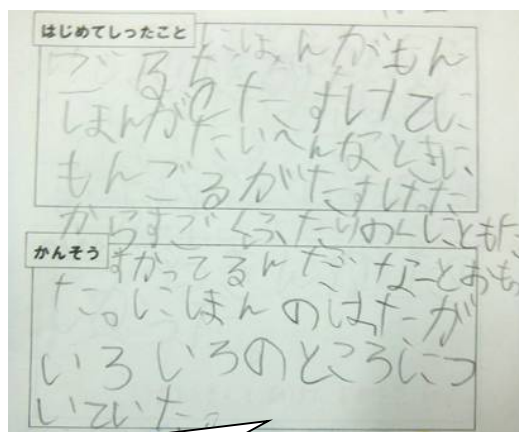
モンゴルにあんなのがあるなんて、わたしもモンゴルにいてみたくなりました。



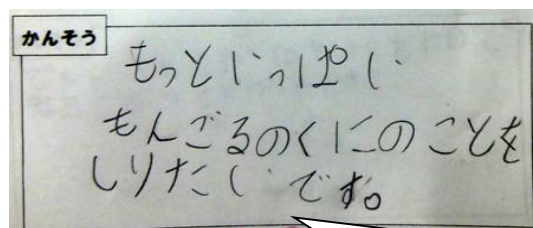
もんごるで にほんじんがかつやくしているということをはじめてしました。



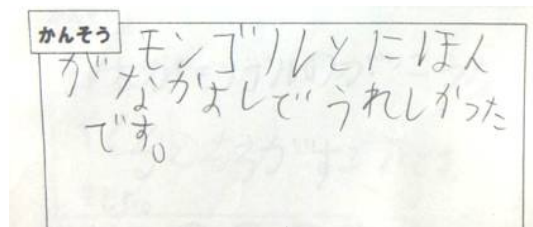
モンゴルとにほんが つながっているのがわかりました。がっこうを 55こたてて すごいなとおもいました。



にほんがもんごるをたすけて にほんが
たいへんなときに もんごるが(日本を)た
すけたから すぐふたりのくにとも たす
かってるんだな—とおもった。
にほんのはたが いろいろなところにつ
いていた。



もっといっぱい もんごるのくにのことを
しりたいです。



モンゴルとにほんが なかよしで うれし
かったです。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

授業実践の一番の成果は、児童の変容である。モンゴルを身近に感じることができ、世界の様々な文化があることを、体験を通じて学ぶことができた。外国のことをもっと知りたい、行ってみたいという異国や異文化に対するプラスの感情を育てられたことは、今後、国際理解教育をすすめる中で大きな強みになると考える。

今回の授業実践に当たり、港区の設置する国際科について改めて学び、学習指導計画を作成した。また、ゲストティーチャーを呼ぶこと等、年度当初の予定にはなかったことであるだけに、その必要性や手配の方法など、様々な機関や人の協力を得て実現することができた。

授業の実施については、常に校内に対し公開をした。自分の担任する学級については、保護者にも積極的に公開し、協力と理解を得ることができた。

授業後の検証については、参観してくれた他の教員に意見をもらうなどし、児童の反応や分かりにくかった点などを明らかにしていった。毎時、児童の書いた振り返りカードを分析し、分かりにくかった点などを明確にした。

3学級分の国際科の授業を受け持つことができたので、毎時、授業内容の改善や修正を行いながら次の学級で実施することができた。児童の書いた振り返りカードや実態をもとに、何がもっと知りたいのかを探り、映像資料の追加など、修正を加えていった。今後も、自分だけではなく他の教員も活用できる汎用性のある教材として残すために、教員向けの説明を加える等改善していく必要があると考える。

10 教師海外研修に参加して

私はこの研修に、自分自身の視野を広げたい、子供たちに世界の素晴らしさや困難な状況を伝えたい、国際理解や国際協力の輪を広げたいという思いをもって参加した。

研修を終えた今、この経験は、私の想像をはるかに超える価値のあるものとなった。人との出会いや、人や国同士のつながり、自然や文化の素晴らしさを肌で感じることは大きな財産である。また、モンゴルでの体験を子供たちに伝えていくという使命があったからこそ、今回の学びを振り返り、改めて調べたり、考えたり、教材化するという経験ができた。子供たちの、「モンゴルのことをもっと知りたい。」「モンゴルに行きたい。」「先生、また授業やって。」といった反応から、少しでも国際理解の種がまくことができたのかなと嬉しく思っている。

ここで学んだことに満足するのではなく、今後、教師として、また一人の人間として、さらに成長できるようこれからも挑戦し続けたい。